



海の火祭



川端康成

海の火祭うみ ひまつり

定価一五〇〇円

昭和五十四年五月二十日第一刷
昭和五十四年六月五日第三刷

著者 川端康成かわばた やすなり

編集人 吉田 掟二

発行人 高原 富保

発行所 毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋

〒530 大阪市北区堂島

〒802 北九州市小倉北区紺屋町

〒450 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

海の火祭* 目次

香 の 樹	鮎	精 霊	円 舞	接 吻	幻 の 馬	海浜の歌垣
192	142	106	71	47	31	7

海の火祭 227

仮装舞踏 270

彼等の行衛 308

終章 323

解説 佐伯彰一 326

覚書 川端香男里 333

装釘
山
高
登

海 の 火 祭

海浜の歌垣

海は白い砂浜がさしかけた緑色のパラソルだった。太古の民は空が海を染めるのだと信じたという。海の娘達も砂浜に水の緑が映っていればこそ、潮に打ち上げられた美しい海藻のあやにしきのように、裸を投げ出していられるのだろう。

渚は海のパラソルを刺繍して、そよ風に翻る銀色のリボンだった。銀の小波の上を真赤なゴム毬が海鳥のように飛んでいた。立ち並んだ脱衣場の葦簾張の屋根は糸遊に煙った真昼だった。

ホテルの隣はシャム公使の別荘だった。すっかり白い別荘の建物の輪郭を朱色の線が描いていた。ホテルの庭一ぱいの芝生は真白な貝殻のようなベンチをたった一つ隅っこに載せていた。屋根は芝生が這い上った草色だった。

庭園食堂では魚のように近眼で魚のように匂いに敏感らしいボーイが、客のおしゃべりに冷やかな顔つきで食卓の皿を見下していた。食卓の少女達の腿には雲母の粉が光っていた。

食堂の西窓は板塀へ開いていた。塀に添うてポプラの若木が五、六本皆枯れていた。一本の瘦せた青桐だけが水々しい葉を落さずにいた。その青桐の横に公使館の白猿がぬっと顔を出して、弓子が投げるコールドハムの肉切れを海老のように長い指で巧に受け取っていた。

弓子は片手を伸ばして青桐の幹を握りながら、海辺のマントの袖を拡げていた。彼女は梔子色の翼を張った鳥である。稲妻形に裾を切ったマントは前の方で短くなり、梔子色の太い立縞が翼の羽毛に見える。

その弓子の後姿を見ながら、新一は横の立川に軽く笑いかけて言った。

「近江なる筑摩の祭とくせなん、だね。」

「なに、なによ。」

弓子の竜胆色の海水帽が桐の幹にくるりと半円を描いて振り返った。

「伊勢物語の歌ですよ。あなたがプラנקトンだって言うんですよ。」

「プラנקトンってなによ。」と、弓子は言い捨てて白猿にまた肉を投げた。塀を握っている猿の黒い指が、余りに人間らしいその姿を却って妖怪じみさせていた。伸び上った彼女の足には膝の裏にも暗い窪みもなく、日の光と潮の匂いに明るく染まっていた。

「こんなに綺麗な白い猿は日本に一匹しかいないんですよ。——南国の不老長寿の仙人よ。」そして彼女は翼をつぼめて食卓へ帰って来た。

「プラנקトンってなによ。」

「小さい魚の餌食ですよ。自分では泳ぐ力がなくて、風や波のまにまに漂っている海の植物や

動物ですよ。動物では夜光虫だとか、クラゲだとか、ナマコやウニだとか、貝や蟹の幼虫だとか——」。

「もう沢山だわ。それがどうしたのよ。」

と、弓子は三人の少女達を睫毛の濃い眼で呼んだ。

少女は黙ってアイスクリームの匙を動かしていた。彼女達は黒一色の水着に頭を黒い布できりと結んで、オレンジの花のように清らかだった。逗子の海辺で泳ぐのはこの三人だけのように見えた。それ程彼女等は海に戯れ陸をはにかむ初々しい人魚だった。

「あなたは夜光虫のように美しいのですよ。夜の渚に青く光っている寂しさもあるし、群がると海の水を薄桃色に変えてしまう程美しいし、それからクラゲのように移り気で、刺のある美しい触手を持っているし——しかしクラゲはね、年をとると岩にくっついて堅気になるんだから面白いじゃありませんか。」

林檎とバナナと水蜜桃の果物の皿をボーイが食卓の上へ置いた。新一は萎れた花びらのような林檎の肌をぼんやり眺めていた。

「およろしかったら召し上りません？」と、少女の膝から黄色い果物だった。ニュー・サマー・オレンジだった。

「こりゃあ新鮮だ。」

「毎日水の中で一つずつ食べますの。」

果物を離れた彼女の手を食卓から拾って引っぱりながら、まだ女学校の三年になったばかりの

少女が立ち上った。

「煙草の煙なんか吹きかけられないうちに行きましようよ。」

「ええ。」

「それね、朝子さんのお月さんなの。お月さんを投げるってよくおっしゃるのよ。」

「お月さんなんかより新鮮ですよ。」

「お先。——待っていてよ。」と引っぱられた手の方へ傾いたまま立川に言い捨てて、朝子達は芝生を走って行った。

「じゃあ沖で。」

「ええ。」

新一はオレンジの皮を剥いた。

「そら南国の仙人。」とその皮を投げた。白猿はそれを長い手からぼとりと落して、したりげな厭世家らしくしなびた顔を退屈そうに塀の陰へひっこめた。

三人の少女は砂の上に鳥賊いかのような腹を並べた貸ボートの傍を走っていた。こちらに手を振ってから、綺麗なクロール・ストロークと拔手伸ぬきてとを交えながら鯖色さばの岸辺の水を鯉色かつおの紺の沖へ真直ぐに切って行った。

「あれでやっぱり海豹あざらしの匂いがあるんだからね。」と、立川は彼の従妹達を眺めておだやかに微笑した。

「立川さんまで動物をお出しになったわ。でも海月くらげよりはいいのね。」

「いいや、弓子さんなんか最も海豹の海豹ですよ。」

「また私。」

弓子は新一を睨んで下唇の黒子を噛んだ。美しい癖である。笑う時だけ見える茄子色の小さい黒子である。

「僕達はね——。」と、新一だった。

「あんなに海岸に黒くなっている人群を見ると、千島海豹島を思い出すんですよ。海豹という奴はね、先ず牡ばかりの群が島へ渡つて来て、銘々の巢を作つて待っているんですよ。」

「でも海豹の牡のほうが巢を作るだけ人間より親切だわ。ホテル住いなんか止してしっかり巢をお作りになるといいわ。」

「人間は巢を作るまでもない季節の恋をするんですよ。夏海辺は昔の歌垣ですね。」

浜に鈴を振る音だった。小学生達が渚に整列した。沖からヨットが身を翻す燕のように帆を傾けて帰ってきた。三人の少女は巻足でニュー・サマー・オレンジを波に投げ合つては、捨浮で手足を休めながら、新一や立川等のヨットが来るのを待っている。

ペン字の紙切れやカステラの木箱の切れっ端なぞの新しい標札に人を孕んだ町は、日盛りの海へ歩いていた。歩かぬのは道の真中で御詠歌を歌っている順礼女一人だった。彼女の背で赤ん坊が炎天ぼしの自分の頭を平手でびたびた叩いていた。姉娘はちよこちよこと軒並みに報謝を乞うていた。道の上の爽竹桃の花が人々の足を水へ早めさせた。ところどころの辻に「海岸近道」の木札がまだ新しい。

の足が並んで焼豚を買った。

誰かが思い出したようにふと山を眺めて、岬の鯛が聞えると、海はミルクに灰色が勝つて来た。それが暗い緑色に移って行った。脱衣場の旗が次から次へ倒れた。

ヨットが入江へはいって来た。急に帆を翻したと見ると、美しい水路を曳ながら海岸線に沿って上陸前の快走だった。その行手の砂浜に一頭の馬が逞しく縮めて振り上げていた前足をさっと投げ、人のない渚を射る稲妻のように飛んで行った。

「あれだ。あの馬だ。立川君。」と言うなり、新一は三角帆の蔭から海へ躍り込んでいた。馬上の女は白い流星だった。新一は岸に噛みつきたい焦ら立たしきで水を掻き破りながら抜き手を切った。しかし渚には蹄の跡があるばかりだった。彼はその上へ転がって荒々しく海気を呼吸した。

夕暮は家々に干した海水着にあった。砂地の松林の中の青塗りの大きい水槽が目立つ別荘で、朝鮮の小娘が海水着を洗っていた。別荘番の爺やは温室の横で汗ばんだ馬の足を洗っていた。

十二夜の月が鳴鶴崎の嘴を流れ木のように描き出した。

弓子は卓燈から橙色の柔かい光を背に受けて鏡の前に立ち、銀の鏡を磨くように白粉を拭き取った。白くなった紅絹をはたと窓ではたくと、一筋の糸が布を離れて来た。彼女は瞳を上睫毛へ寄せて微笑みながら、左の素足を真直ぐ窓に持ち上げた。細い絹糸で足首の細さを計った。そして紅い糸をほうほうと喜びの軽い口笛が芝生へ吹き落した。

その喜びでくると解いた伊達巻と一緒に浴衣を革椅子へ投げ捨てて、彼女は卓燈の鎖を引いた。さつと月光が弓子の肌にあたった。彼女は白いベッドへ跳ね上った。そしてレモンの輪切

りて荒々しく乳房を撫でた。爽やかに冷たいレモンの汁は彼女の眼を初恋のように閉じさせた。やがて足の先に並んだ五つの蛋白石を果物で磨いてしまうと、彼女はどこを接吻されてもレモンなのだ。月光は白蚊帳しろかやの中に南国を匂わせていた。

しかし、白蚊帳が灰色の影に沈んできた。海が月に向って噴火を始めたのだ。火山の噴煙のうな夏雲が沖に黒々と立ち上って、憎々しい力で月の半ばを呑んでいた。月は気がいじみた青い光の布を、その黒雲の中へ流し込んでいた。

新一の胸をカツカツと幻の馬の蹄が踏んでいた。蹄の音に調子を合せて、彼は拳こぶしでどんどん胸を叩いていた。次第に握り締めて来る自分の掌の力に堪えられなくなって、彼はベッドから起き上った。

渚の蹄の跡は満ち潮が埋めていた。月と雲との凄しい戦いが、彼の感情にまた火をつけた。彼は窓に突いた腕で頭を抱えて坐っていた。

雲は海から足を浮かせると、急に弱々しく漂うて行った。月光が沖へ小さい円を描いた。その円がいつとはなく崩れて、岸の方へひたひたと光が伸びて来た。

渚から突然若々しくはずんだ女の笑い声だった。張り切った体で炎を飛び越える時の女の笑い声だった。一人や二人ではない。雌鹿めじかのように逃げ廻ってから、今男に捕まろうと砂の上に転んだ女の高笑いだった。掌一ぱいの花びらのように原始の本能を投げつける女の高笑いだった。

新一は窓を掴んで立ち上った。左の手丸山寄りの渚に人影が戯れているらしく見えた。爆音と共に火花が海へ火の垂枝柳しだれやなぎを描いた。